

3 佐大附特版「思考力、判断力、表現力」を引き出す授業作りのポイントを踏まえた授業研究を行う。

今期研究の3年次（最終年度）となる令和6年度は、佐大附特版の「思考力、判断力、表現力」を引き出す授業作りのポイントを踏まえ、各学部別に授業研究を行うこととした。各学部年間2回の研究授業を行い、本研究紀要では、7月から9月に実施した第1回研究授業についてまとめる。なお、各学部の研究授業における対象児童生徒を $\alpha \sim \delta$ と表記する。

（1）小学部 生活単元学習「なつやさいでつくろう」

本校小学部には、A組（1・2年生）5名、B組（3・4年生）6名、C組（5・6年生）6名の計17名が在籍している。昨年度のグループ研究で取り組む中で整理した「思考力、判断力、表現力」を引き出す授業作りのポイントにも含まれる、「好きなものを取り入れた授業（単元作り）」「毎時間のサイクルを整えた見通しのもてる授業」「児童の思いや考えを受け止める教師の姿勢」を重視していく事を年度当初より小学部の教師間で共通理解し、それらを取り入れた授業作りを行なっている。昨年度の取り組みや年度当初からの取り組みにより、日々の学習を積み重ね、安心した学習環境の中で、自分なりに考えたことを表現したり工夫をしたりする児童の姿や、やってみたいこと等を選択して取り組む姿、教師の支援を受けて自分の思いをそれぞれのコミュニケーション方法で伝えようとする姿が見られている。

このような児童の思考・判断・表現する力が少しずつ育ってきている中、研究3年目となる今年は、思考力、判断力、表現力を児童一人一人がさらに広げ深めていくことが重要であると考え、学部研究を進めていくこととした。

学部研究を進めるにあたり、現在の児童の様子から改めて育てたい思考力、判断力、表現力について小学部職員で検討を行った（図53）。児童一人一人の実態や発達段階は様々であるが、次のような各学級の実態が見られる。

A組は、生活経験が少なく、身の回りの事象に働きかけて気付いたり、知ったり、興味関心をもち始めたりする段階である。B・C組では、興味関心のあることには主体的に取り組むことができるが、慣れない活動については受け身になりがちで、自分のこととして意識したり、自分から活動に取り組んだりすることがまだ少ない。



〔図 53 小学部段階の思考力・判断力・表現力〕

そのような現状から、児童が思考力、判断力、表現力を発揮するためには「学習活動に興味関心をもつこと」が大切であることが挙げられ、その基礎として、周囲の物事や人に意識を向けることや活動内容が理解できる等の、「事象の捉え」が必要であることが考えられた。また新たな活動に取り組む場面では、活動内容を「自分事として捉える」ことができると興味関心

の広がりや目的意識に繋がり、「思考力・判断力・表現力」を発揮する事に繋がるのではないかとの意見が挙げられた。

そこで、小学部段階では様々な学習経験を積み重ねて知識や技能を身に付けながら、身の回りの事象に働きかけ、まず興味関心を広げていくことを大切にしたいと考えた。学年が上がる中で、中学部・高等部段階を見据え、興味関心の外にある事柄についても、その事柄の大切さや面白さを感じ取り、少しずつ自分事として受け止めて取り組もうとする力を高めていけるようにすることを小学部の教師間で共通理解した。

以上のような小学部の児童の実態についての検討を経て、本研究では「自分事として捉えること」をキーワードの1つに設定して授業実践を行うこととした。これは、昨年度末にまとめた「思考力、判断力、表現力を引き出す授業作りのポイント図（P75）」のうち、特に「自分事としてのめあての設定」にあたる。児童の興味関心のあることを題材として単元に設定したり、活動内容に取り入れたりした上で、学習活動を自分事として捉え、活動のめあてを達成できるような工夫や手立てを検討していくこととした。そして、「振り返りの充実」や「子どもの内面を見取る評価」等、ポイント図の様々な視点も取り入れながら各学級で授業作りを行っていくこととした。

ア 第1回研究授業の対象学級（小学部C組）について

小学部では7月に第1回研究授業を実施した。対象学級の小学部C組は、5年生3名、6年生3名の計6名の児童が在籍している。これまでに本学級では、「思考力、判断力、表現力」を発揮できるよう、次のような活動に取り組んできた。「宇宙科学館に行こう」という単元では、校外学習の事前学習として、風で物が浮く装置を製作し、実際に風船を飛ばしてみ、風の強さでどれくらい高く風船が飛ぶのかを比較して考えた（図54）。また、本学級の児童は制作活動をすることが好きな児童が多く、自分が好きな色や材料を選んで制作に取り組んだり、テーマにそって自分が作りたいものや描きたいものを決めたりする経験をしている（図55）。さらに、生活単元学習の毎単元の最後



〔図 54 比較実験の様子〕



〔図 55 制作活動の様子〕

には、「思い出シート」という振り返りシートを作成しており、楽しかったことや頑張ったことを、写真を手がかりにして振り返り、思いを言葉や指差し等で表現する経験も重ねている。

第1回研究授業の単元に関連することとしては、児童はこれまでの学習活動において、野菜や花等の栽培の経験があり、栽培活動に慣れ親しんでいる。今年度C組では育てたい夏野菜を自分で決め、4月から栽培活動に取り組んだ。また、今年度は種蒔きからスタートし、日替わりで水やり当番に取り組んだり、野菜の観察をしたりすることで植物の成長過程に気付く姿も見られた。「ピーマンが大きくなっているよ。」や「見て！ぼくのトマトたくさん

できている！」と実がなる様子を嬉しそうに報告する姿や、なっている実を笑顔で触ったり匂いを嗅いだりして野菜に興味を示す姿も見られた。

イ 単元について

自分たちで育てた野菜を使って、調理したり、食べたり、制作に使ったりと興味関心を広げ、野菜に関わる活動に主体的に関わることができるよう、「なつやさいでつくろう」という単元を設定した。4月に植えた夏野菜がちょうど収穫時期である6月～7月にかけて本単元を設定した。学習内容は、主に①自分たちが育てた野菜を使ってエプロンやエコバッグ等の制作活動を行うこと、②必要な材料を買いに行き、自分たちで育てた野菜を調理して食べること、③学習のまとめとして新聞作りを実施し、頑張ったことや楽しかったことを表現することを挙げている。まず野菜を使った制作活動では、食べること以外にも野菜に楽しく関わる活動を設定することで、野菜があまり好きではない児童でも「野菜って面白い」と感じたり、野菜にプラスのイメージをもったりすることが期待できると考えた。次に自分たちでピザ作りに必要な材料を考えて、それらを買いに行き、具材を切り、好きな具材をのせて作る。一連の活動を行う中では、「どんな材料が必要か」「自分が買うものはどれか」「どれくらいの大きさに切れば良いか」等、児童が考えたり決めたりする場面も設定する。自分で育てた野菜を使った活動に取り組むことで、調理活動についても自分事として捉えて思考・判断・表現する姿を引き出せるのではないかと考えた。

単元全体を通しては単元の構成や授業サイクルを工夫し、毎時間の学習では自分で選択したり、考えたことを表現したりできる場面を多く設定し、児童の思考力、判断力、表現力を育てていきたいと考えた。

【単元目標・評価規準】 ア知識及び技能 イ思考力、判断力、表現力等 ウ学びに向かう力人間性等

各教科等	単元目標	単元の評価規準
生活 キ 手 伝 い ・ 仕 事	ア 調理活動や買い物、準備や片付け等の仕方について知ることができる。	調理活動や買い物、準備や片付け等の仕方を知っている。(小2) 調理活動や買い物、準備や片付け等の仕方を知り、進んで取り組んでいる。(小3)
	イ 夏野菜を使った調理活動について考えたり、必要な材料を考えて調理したりして、気付いたことを表現することができる。	夏野菜を使った調理活動について考えたことを表現している。(小2) 夏野菜を使った調理活動について考えたり、調理に必要な材料を考えたりして、気付いたことを適切に表現している。(小3)
	ウ 夏野菜の調理活動等を主体的に楽しむことができる。	夏野菜の調理活動等に主体的に楽しんでいる。(小2、3)
自然 生 活 サ 生 命 ・	ア 夏野菜の特徴や変化を知ることができる。(小2)	夏野菜の特徴や変化のクイズに答えている。
	イ 夏野菜の特徴や変化が分かり、それらを表現しようとするすることができる。(小2)	夏野菜の特徴や変化が分かり、それらを表現しようとしている。

	ウ	夏野菜に関わる活動に親しむことができる。(小2)	夏野菜に関わる活動に親しんでいる。
図画工作 A表現	ア	夏野菜の断面に絵の具をつけてスタンプすることができる。	夏野菜の断面に絵の具をつけてスタンプを押している。(小2) 夏野菜の断面に適切に絵の具をつけてスタンプを押している。(小3)
	イ	様々な夏野菜の断面の特徴を生かして工夫してスタンプすることができる。	様々な夏野菜から選んでスタンプを押している。(小2) 様々な夏野菜の断面の特徴を生かして工夫してスタンプを押している。(小3)
	ウ	夏野菜を使った制作に意欲的に取り組むことができる。	夏野菜を使った制作に意欲的に取り組んでいる。(小2、3)

【単元計画】

次	活動概要	学習内容
1	【導入】 学習への意欲がわく活動	単元の予定、制作したい物を決める
		野菜クイズ 野菜に関するアンケート、めあて決め
2	自分たちが育てた野菜を使った制作活動	制作①うちわ
		制作②エコバッグ
		制作③バンダナ、エプロン
3	必要な材料を買いに行き、自分たちで育てた野菜を調理して食べる活動	買い物リスト作り
		買い物練習
		スーパーへ買い物
		調理の下準備
4	【学習のまとめ】 頑張ったことや楽しかったことを表現する活動	調理 ・ピザ作り ・実食
		野菜新聞作り 野菜新聞の発表会



「思考力、判断力、表現力」を引き出す授業作りのポイントを本研究授業ではどのような具体的な手立てとして仕組んでいくか検討を行った。「自分事としてのめあての設定」については、小学部段階では「活動を自分事として捉える」と読み替えることとして、目的意識をもって活動に取り組むことができるような手立てを考えていくこととした。

【授業作りのポイントを踏まえた手立て】

ポイント	具体的な手立て
自分事として捉える	<ul style="list-style-type: none"> 制作したい物を自分たちで決める活動を設定する。 ピザの材料に何が必要かを自分たちで調べて買い物をする活動を設定する。 大きさを考えて材料を切る等、ピザにのせる材料を事前に自分たちで下準備をする活動を設定する。 
振り返りの充実	<ul style="list-style-type: none"> 毎授業、学習の最後にその日の活動を振り返り、表現する機会を設定する。 新聞作りと新聞の発表を通して振り返りを充実させる。 
児童の内面の見取り	<ul style="list-style-type: none"> 言葉での表出が少ない児童が思いを表現できるようにシンボルを使用し選択できるようにしたり、表情やサインを見取ったりする。 前の授業で興味をもっていたこと等を選択肢に入れておくようにする。 
教師の聴く（観）姿勢	<ul style="list-style-type: none"> 児童のアイデアや思いを大切にし、活動に取り入れ、意欲や工夫を促すようにする。 制作では何を表したかったかや、工夫点等を作品から読み取ったり聴き取ったりして、賞賛するようにする。 新聞作りのやりとりの中で児童の思いを丁寧に聴き、受け止めて、記事作りに生かせるようにする。 
教材・教具の工夫	<ul style="list-style-type: none"> 新聞記事作りの際、児童の思いを十分に引き出すための手掛かりとなる各活動の写真を準備する。 単元導入で学習用PCを使って野菜クイズをしたり、新聞記事作りで友達がピザを食べる様子を動画で提示したりする等、ICT機器の利活用を行う。 
授業展開の工夫	<ul style="list-style-type: none"> 授業サイクルを意識した授業展開とする。 

ウ 本時の取組について

本単元では4次の学習の振り返りとして取り組んだ野菜新聞作りの授業を本時として取り上げ、検討を深めた。ここでは児童2名を対象児として記載する。

【本時の目標及び対象児の本時の目標】

本時の目標		対象児α	対象児β
生活科	活動の様子の写真を手掛かりに夏野菜に関わる活動を振り返り、伝えたいことを表現することができる。 (思考力・判断力・表現力)	活動の様子の写真を手掛かりに夏野菜に関わる活動を振り返り、伝えたいことを選ぶことができる。 (小2段階)	活動の様子の写真を手掛かりに夏野菜に関わる活動を振り返り、伝えたいことを話したり書いたりすることができる。 (小2段階)
図画工作科	いくつかの材料や用具を使い、工夫して新聞のレイアウトをすることができる。 (思考力・判断力・表現力)	いくつかの材料や用具を使い、教師と一緒に工夫して自分の記事のレイアウトをすることができる。 (小2段階)	いくつかの材料や用具を使い、工夫して自分の記事や新聞のレイアウトをすることができる。 (小3段階)

【本時の流れや具体的な活動内容】

活動の流れとして、①単元の振り返り、②頑張ったこと・楽しかったことの発表、③新聞作りの手順の確認、④自分の記事の作成、⑤自分の記事のデコレーション、⑥模造紙へのまとめ、⑦次時の見通しをもつ、を行った。

活動内容 (●支援 □児童の様子)	
①単元の振り返り	●これまでの活動の様子を写真で活動ごとに振り返る。その際、児童の輝いていた姿を児童へ伝え、賞賛した。
②頑張ったこと、楽しかったことの発表	<p>●活動のシンボルからそれぞれが頑張ったこと、楽しかったことを選べるようにした。</p> <p>●発表の際に緊張する児童には、安心できる言葉かけを行った。</p> <p>□どの児童も自分の写った活動中の写真をじっくり見めて活動を振り返り、頑張ったことや楽しかったことをシンボルから選んで発表することができた。</p>



〔頑張ったこと・楽しかったことを発表する児童〕

③新聞作りの手順の確認

- 新聞作りは初めての活動になるため、新聞とは何か例となる写真を紹介した。
 - 自分が頑張ったことを知ってもらい、意欲的に学習に臨めるよう、なぜ新聞作りをするのかを伝えた。
 - 新聞の出来上がりのイメージを共有できるように図を提示し、手順を視覚的に伝えた。
 - 記事の見本を複数提示し、自分なりにレイアウトを考えられるようにした。
- 記事の見本を見に来て新聞作りに興味をもったり、流れの説明を電子黒板で確認したりする児童の姿が見られた。



〔記事の見本を眺める児童〕

④自分の記事の作成

- 導入で発表した頑張ったこと・楽しかったことの場面の写真の中から記事にしたいものを選び、シートに貼り付けるようにした。
 - その時の気持ちや活動の様子を児童の言葉で表現できるように吹き出しを用意した。その際、児童の伝えたい思いが引き出せるように、言葉やシンボル等を用意し、児童の実態に応じて教師とやり取りをするようにした。
 - 活動の様子の写真や、ピザを食べた他学級の児童からの感想の動画を準備し、それを手掛かりに伝えたいことが考えられるようにした。
- 写真や動画を見て、伝えたいことを教師とやり取りをしながら考えたり、文章にして表現したりしていた。記事を進んで2枚作成する児童もいた。



〔教師とやりとりをして記事の吹き出しに文章を書く児童〕

休憩

⑤自分の記事のデコレーション

- 記事に関係のあるイラストを用意し好きな場所に貼ったり、色を塗ったりできるようにした。
 - 早く終わった児童が、時間いっぱい活動に取り組めるように模造紙の題名や枠のデコレーション材料と道具を準備した。
- 好きなイラストやシールを選んで記事をデコレーションしていた。



〔記事のデコレーションをする児童〕

⑥模造紙へのまとめ

- 記事を一人一人模造紙に貼る際、貼る場所が分かるように目印を付けた。
- 新聞が出来上がっていく過程を見て、「わあ、すごい」と呟っていた。

〔協力してまとめの作業に取り組む児童〕



⑦次時の見通しをもつ

- 次時の学習内容（模造紙の仕上げ）を確認し、目的意識をもち意欲が高まるようにした。

エ 対象児の様子と評価

児童αの様子とその評価について紹介する。児童αは、自分なりの思いや考えをもっているが、言葉の表出や言葉で思いを伝えることが難しく、PECS®、表情、視線、指差し、身振り等を用い、教師とのやりとりの中で伝えたり、教師が児童の思いを汲み取ったりしている。そのため、単元の活動の中から記事にしたい活動を選ぶ際には、「活動のシンボルシート（図56）」を使用し、活動内容を表すシンボルを提示しながらやり取りを行い、児童自身の思いを引き出すようにした。その結果、提示されたシンボルの中から記事にしたい活動を指差しして選ぶことができた。

記事作りで楽しかった活動の写真を選ぶ際には、エコバッグ制作でおくらの野菜スタンプを押している時の写真を選んだ。エコバッグの制作時には自分のイメージした表現ができるよう、好きな色を選んだり、間隔を考えたりしながらスタンプを押している様子から「思考力、判断力、表現力」を存分に働かせながら活動しているように見えた（図57）。また、時間いっぱい活動し、何度もスタンプを押し、複数枚作品を完成させる意欲的な姿が見

られた。このような制作する姿を踏まえ、本人の思いがあり、印象に残っていた活動のため、記事作りでエコバッグ制作の場面の写真を選んだと考えられる。新聞記事の吹き出しには、「なすに色をつけるのが楽しかった」と書いた。記事のデコレーションでは、材料として、シール、野菜の塗り絵、うちわ等の工作で作った物の塗り絵が入った3つのトレイの中から、自分でシールを選ぶことができた。一度貼ったシールを剥がして貼り直す場面もあり、シールを貼る位置を自分なりに考えて貼っているようだった。エプロン姿の男の子のイラストの色塗りでは、自分のエプロン姿の写真を見て指差しをしながら、何色の色鉛筆で塗るかを考



〔図 56 活動のシンボルシート〕



〔図 57 児童αの制作の様子〕

えた上で色を選んで塗ることができた。以上のことから生活科、図画工作科ともに本時の目標を達成することができたと評価した。

児童βは、記事作りではピザの調理活動を選んだ。「友達にもピザをプレゼントしたい」と児童βからの発案でピザを作ってプレゼントすることになった。そのことが印象に残っており、調理活動の様子を記事にしたと考えられる。児童の伝えたいことが思い浮かべられるよう、教師とやりとりをしながら気持ちを引き出したり、タブレット端末を利用してB組からもらったお礼の動画を見る時間を設けたりした。お礼の動画を見ている時は、嬉しそうな表情であった。記事作りで児童β自身がB組の友達が食べている写真を2枚選んだことから、お礼を言ってもらえて「嬉しかった」という児童の気持ちが伝わってきた。記事の吹き出しには、「とてもおいしかったと言ってきてニコニコになったよ」「今度おばあちゃんにピザを作ろう」と書くことができ、気持ちを文に書いて表現することができた(図58)。



〔図58 児童βの記事〕

記事のデコレーションの際は、自分から材料が入っているトレイの場所に行き、記事の内容に合うイラストを自分で選ぶことができた。イラストの色塗り時には、ピーマンの中の色や、ピザに乗せる具材の色等、本単元での活動の経験を生かして色を選択して塗ることができた。イラストの色塗りが終わると、イラストを紙の上の色々な場所に試しに置き、どこに貼るかを見て考えていた。「ここに置くと隠っちゃうから・・・」と言いながら、写真や文を隠してしまわないように貼れる位置を考えていた。以上のことから児童βについても、生活科、図画工作科ともに本時の目標を達成することができたと評価した。

オ 成果と課題

第1回の研究授業を実施後、学部の教師間で授業研究会実施した。その際に出た成果と課題・今後の展望について以下のようにまとめられた。

【成果】

自分たちの育てた野菜を使って、制作活動や調理活動に取り組んだ。制作活動では、エプロン等の完成形をイメージしながらスタンプを押したり、調理本番で身に付けるものという意識をもって、どんな模様にしようか、どんな色を使うか等を児童一人一人が自分なりに考えて表現したりしていた。3回の制作活動を通して、自分なりにスタンプ活動に取り組もうとする姿がどの児童にも見られた。

調理活動に向けた学習では、実際のピザの画像を確認し、どんな具材を準備するかを友達や教師とやりとりをしながら考えた。また、友達と分担して買うものを決め、「買い忘れたらピザが作れない。」と買い物をすることを自分事として捉えて取り組む姿が見られた。野菜の下準備でも、生地のにせる具材の大きさを考えながら、調理器具を使って切る児童の姿が見られた。

新聞作りでは、児童ごとに各活動の写真を用意した。個に応じて注目しやすいように並べる等提示の仕方を工夫することで、写真を用いて自分の思いを表現することができた。児童によっては思いを引き出すためにシンボルを使用したシートを用いた。言葉の表出の少ない児童でもシートの中からシンボルを選ぶことで思いに合った文を作ることができた。ピザをB組にプレゼントした後にお礼の動画をもらい、タブレット端末で児童に見せたところ、プレゼントできたという達成感だけでなく、お礼をもらって嬉しいという思いを引き出すことができた。

単元を通して野菜を取り扱ったが、制作や調理を重ねることで野菜が苦手な児童も、ピザ作りでは全員が野菜を乗せたピザを食べることができたことは本単元の成果の一つである。また、制作で野菜のスタンプを用いてうちわやエコバッグ等を作ったが、3回の野菜スタンプの活動を通して、スタンプの押し方や色を自分なりに考えながら思いをもって作ることができた。繰り返し制作活動や買い物、調理活動を設定することを通して、児童が活動に自信をもち、自分事として捉えて、自分で考え、自分なりに思いをもって意欲的に取り組むことができたことが本取組の成果であると考えている。

【課題・今後に向けて】

新聞作りの際に活動のことを思い出すことが難しく、思いを表現するのに時間を要した児童もいた。記憶力や言葉の表出の実態をさらに把握し適切な手立てをもっととっていく必要があった。また、言葉の表出が少ない児童が思いを表出できるよう今回はシンボルを用いたが、思いを表出する際の手立てについてさらに様々な効果的な方法を探っていき、児童が自分の思いをより豊かに表現できるよう支援していきたい。

小学部第2回研究授業はB組で実施する予定である。C組より低学年のため経験が少なく、興味関心の幅が狭いため、現在は様々な学習経験を積み重ねて興味関心の幅を広げている段階である。B組はC組が第1回研究授業で調理したピザを受け取って食べる経験をした。ピザを食べる中で調理への興味関心が高まり、自分たちもピザを作りたいとの意見が寄せられた。そこで後日、B組でもC組のレシピを譲り受け、ピザ作りを行った。児童は以前から食への関心が高いが、今回自分たちで実際にピザを作ったことで、「また作りたい。」「今度は何を作ろうか。」と、調理活動への意欲が高まっている状況である。そこで第2回研究授業では、今回高まった調理に対する意欲とB組の人との関わりを好むという実態を活かして単元を立案することとした。具体的には学級外の他者をお客さんとして招き、料理を振る舞う形の活動を行う。料理を試作したり振る舞った料理に対する他者の反応を感じ取ったりすることを通して活動を自分事として捉え、めあてをもって取り組み、児童が「思考力、判断力、表現力」を発揮する姿を目指したい。また、児童の実態が大きく異なることから実態に応じた役割を設定する。それぞれの仕事の影響を受け合う形で協力して料理を完成させることを通して、自分の役割の意味を理解し達成感や成就感を感じ、次時への意欲に繋げることを目指す。